三加和中学校　学校だより　第２５号

R4．1．17

文責　井上雄治

『一人の笑顔のために』

日本赤十字社のはじまり

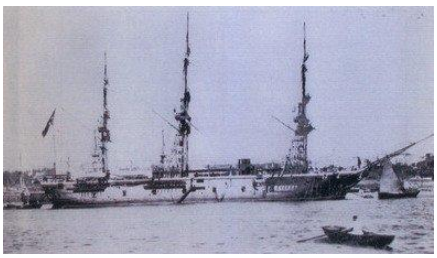
前号では、青少年赤十字（JRC）について説明しましたが、今回は日本赤十字社について紹介します。日本赤十字社は、1877 年（明治 10 年）の西南戦争の最中に設立された**「博愛社」**という救護団体が、その前身です。

日本赤十字社　創立者（初代社長）佐野常民

佐野は、大阪の「適塾」の緒方洪庵より医術を学び、「医は仁なり」（身分に関係なく患者は平等に診るのだ）と教えられました。その後、1867（慶応３年）佐賀藩士としてパリ万博の派遣団に加わり、現地で赤十字の展示を見た佐野は、**「敵味方の区別なく、救う」**という赤十字精神に感動しました。人道精神が世界共通であることを実感した瞬間です。

1877 年２月に西南戦争が勃発しました。明治政府軍と薩摩軍の激しい戦闘が繰り広げられ、両軍ともに多数の死傷者を出しました。この時、この悲惨な状況に対し、佐野と大給恒の両元老院議官は、救護団体による戦争、紛争時の傷病兵の救護の必要性を痛感し、ヨーロッパにある赤十字と同様の救護団体を作ろうと思い立ち、奔走します。しかし、その実現には時間が掛かることが判ると、佐野は、戦場で負傷する人々を一刻も早く救護したいと考えました。ついに征討総督有栖川熾仁親王に直接、博愛社設立の趣意書を差し出すことに意を決し、1877 年５月、熊本の司令部に願い出ると、有栖川宮熾仁親王は英断を以てこの博愛社の活動を許可されました。救護活動の許可を得た博愛社の救護員は、直ちに現地に急行し、官薩両軍の傷病者の救護に当たりました。1877（明治 10 年）に設立された博愛社は、1886（明治 19 年）に日本政府がジュネーブ条約に加入すると、翌 1887 年に名称を日本赤十字社と改称し、現在に至ります。

日本赤十字のはじまりの地は、私たちが暮らす熊本にあったのですね。玉東町にある「正念寺」と「徳成寺」という２つのお寺は、西南戦争時の官軍の病院跡であるとともに、博愛社が最初に救援活動を行なった場所とされています。



国際活動のはじまり

1890（明治 23）年９月 16 日夜、日本への表敬訪問を終え、帰路の航海についていたトルコ（オスマン・トルコ帝国）の軍艦エルトゥールル号が紀伊半島南方の熊野灘で暴風雨に見舞われ遭難し、オスマンパシャ提督以下の乗組員 527 人が死亡する大惨事となりました。生存者は 69 人だけでした。遭難現場に近い和歌山県大嶋村の村民は、水兵たちの遺体収容や生存者の介護など、不眠不休の救護活動を行いました。生存者の大半は、急を知らされたドイツの軍艦ウルフ号により神戸に移送され、治療を受けることになりました。

日本赤十字社が９月 19 日午後、東京から医師２人、看護婦２人を神戸に派遣すると、一行は神戸の和田岬検疫所を仮設病院に選び、宮内省の医師らと共に負傷者の治療・看護にあたりました。治療を終えたトルコの水兵たちは、翌年、明治天皇の命により派遣された ２ 艘の軍艦でトルコに無事、帰還しました。

1985 年のイランイラク戦争において、国境を閉ざされ、動けなくなった日本人らのために、トルコは特別航空便を出して救出してくれました。「エルトゥールル号」の遭難から９５年後、今度は日本人の危機をトルコ共和国が救ってくれたのです。その後も阪神淡路大震災（1995）、トルコ大地震（1999）、東日本大震災（2011）など、相互に支援し合う関係が続いています。